



## ショートコメント

チャン・ドンゴンは『マイウェイ 12,000キロの真実』(11年)でオダギリジョーとの2枚看板で、ノモンハン事件、独ソ戦、ノルマンディ上陸戦を渡り歩いた孤高のマラソンランナーを演じたが、本作で彼は韓国人監督イ・スンムの演出によって念願のハリウッドデビュー。本作は全編英語劇だが、チャン・ドンゴンの英語力は?また本作のテーマは?

そんな心配(?)をしていたところ、本作の主役はチャン・ドンゴンのセリフを極力抑えた「孤高の戦士」というキャラクター。冒頭のナレーションで、本作ははるか昔のはるか遠い地のミステリアスな「伝説」であると紹介されるとともに、なぜ暗殺集団「悲しき笛」に属する最強の戦士が『子連れ狼』の挿一刀のように、赤ん坊を連れて異国の町ロードにたどり着いたのかが明かされる。まずは、そんな設定に注目!しかし、西部劇とマカロニ・ウェスタンとチャンバラ劇を適度にミックスした、劇画タッチとワイヤー満載で綴られる無国籍映画の出来は?

戦士がロードを訪れたのは、そこに旧友が住んでいるためだったが、今ロードは人口50人の町に落ちぶれており、そこにはサーカス団を率いるエイトボール(トニー・コックス)や酔いどれ男のロン(ジェフリー・ラッシュ)そしてリン(ケイト・ボスワース)という美しい娘たちが住んでいた。映画前半は、リンの提案によってクリーニング店を共同経営することになった戦士が、「人を殺すこと」から「人を生かすこと」の楽しさを感じ取れるように少しずつ「人間変革」していく姿が描かれるが、その主導権はあくまでリン。

その結果、ある日2人は砂漠の中でキスを交わすまでに至るから、このまま2人はこの町で幸せに？

そんなことがありえないのは当然。この前半のストーリーは、あくまでその後に起きる大波乱を楽しむための嵐の前の静けさだ。波乱の第1は、リンの両親を無惨に殺したコロネル大佐(ダニー・ヒューストン)の集団が再度ロードにやってきたこと。暴虐の限りを尽くすコロネル大佐からリンやサーカス団員を守るため、戦士はそれまで封印していた剣を抜いたが・・・。

波乱の第2は、戦士が剣を抜いた音を聞きつけた「悲しき笛」の首領(ティ・ロン)が、「戦士の裏切り」に落とし前をつけるべく、ロードまでやってくること。この師弟対決が最後の見せ場となることは明らかだが、さてその成り行きは？

3月13日に観た『捜査官X(武俠)』(11年)も、『カムイ外伝』(09年)(『シネマルーム23』187頁参照)のカムイも、過去に自分が属した組織から抜け出すのに苦労する物語だったが、それは本作も同じ。そんな物語では映像の美しさとともにアクションの切れ味がポイントになるが、私の目にはチャン・ドンゴンの刀さばきはイマイチ。さらに「悲しき笛」の首領率いる軍団の黒ずくめのカラスのような衣裳がイマイチなら、その立ち回りもイマイチだ。

本作のクライマックスは、ゴーストの町にある観覧車を中心とした、サーカス団員たちとコロネル大佐率いる悪党団との対決。けじめの決戦は、酔いどれ男のあっと驚く「変身」もあって一時はサーカス団の圧勝かと思えたが、そこに「悲しき笛」の軍団が乱入してくると・・・。登場人物のキャラ設定はそれなりに明確、かつストーリー構成もそれなりによくできているが、リンを軸としたサーカス団とコロネル大佐との因縁の争いと、戦士と「悲しき笛」との争いが少しごっちゃになりすぎているのでは？また、西部劇と東洋武術の結合を目指しているのはよくわかるが、その成否は・・・？

2012(平成24)年4月20日記